



Title	学校統廃合による中学生の生活と意識の変化 ; 北海道旧産炭地A中学校を事例に
Author(s)	浅川, 和幸
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 117, 1-31
Issue Date	2012-12-26
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.117.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51014
Type	departmental bulletin paper
File Information	Asakawa.pdf



学校統廃合による中学生の生活と意識の変化

—— 北海道旧産炭地 A 中学校を事例に ——

浅 川 和 幸 *

【要旨】 公立学校の統廃合は、国や地方自治体の財政削減のために、北海道でも急ピッチで進められている。ところで統廃合を進める際に、財政削減というあからさまな目的だけではなく、統合で学校規模を大きくすることが児童・生徒に良い影響をもたらすという説明も持ち出されている。この「規模のある学校」論は、保護者から統廃合の同意を調達することに効果を発揮している。しかしながら、統廃合の生徒への影響を検討した研究は極めて少なく、「規模のある学校」論の真偽も確かめられていない。本稿は、統廃合が行われたひとつの中学校を対象として、その後の変化について事例研究を行い、統廃合の影響を検討した。生徒へのアンケート調査の分析の結果から、統廃合は生徒の学校生活における対人関係、特に友人関係を変え、それと学習面の変化が連動していることが明らかになった。特に二つの要因が、この変化に影響していた。第一に、統廃合は、廃校とする規模の小さな学校の生徒を、相対的に大きな規模の生徒社会に投げ込む形になる。前学校／現学校という差異、すなわち「学校経路」要因である。第二に、女子生徒／男子生徒の差異、すなわち性別要因である。中学時代の微妙な友人関係が、統廃合の評価に大きく影響した。本事例において統廃合の「良い影響」は、部分的で矛盾したものであった。「規模のある学校」論の憶説を、現実的な学校社会のダイナミズムの理解に置き換える必要がある。

【キーワード】 北海道 学校統廃合 中学生 学校生活 意識

0 はじめに

公立学校の統廃合は、北海道においても急ピッチで進められている。学校統廃合（以下では、簡単に「統廃合」と表記する）の主要な理由は、地方自治体の財政削減である。しかしそれはあからさまに持ち出されるのではない。特に保護者へ、学校統合（によって達成された「規模のある学校」が）が「よい影響」を生むという説明がなされている（以下では、この説明を「規模のある学校」論と表記する）。本稿の課題は、統廃合が行われた中学校の事例研究をもとに、統廃合が中学生の生活と意識をどのように変えたのかを、実証的に明らかにすることである。その結果から、学校統合による「良い影響」の真偽を確かめることにある。

本稿は四つの内容で構成されている。

第一に、公立学校の統廃合は、子どもの数の現象や地方自治体の財政削減と関わり、急速に進められている。統廃合の現段階を、先行研究、そして資料や統計を整理することで確認する。また事例研究の位置についても言及する。

第二に、統廃合をめぐる議論の整理を行う。先に述べたように統廃合は、ある調査結果をもとに「良い影響」をもつことが主張され、保持者からも一定の指示を得ている。他方で、統

* 北海道大学大学院教育学研究院 准教授

廃合の「良い影響」が表れるはずの生徒に関する研究は、部分的なものにとどまっている。鋭い対比を見せている。

第三に、事例研究(中学校2年生を対象としたアンケート調査)から、統廃合による生活と意識の変化を明らかにする。具体的には、統廃合を経て、生徒にとって何が変わったのかを学習、学校での生活、意識等の幾つかの側面に分けて分析する。この変化の背景を明瞭にするために、二つの分析視角を用いた。ひとつは、「学校経路」である。これは統合前に所属していた学校と現在の学校の差異を重視する考え方に基づく。もうひとつは、性別である。中学生という特定の時期における学校生活の大きな変化、特に友人関係の変化は、性別によって違いをもった表れ方をするという考え方に基づく。そしてさらに、学校生活の個々の側面がどのように関連しているのかを明らかにする。

第四に、統廃合を進める説明として持ち出されている「規模のある学校」論が見落としている問題を、事例研究で明らかにしたこととの関係で整理し、総括する。

ところで、本事例研究は三つの調査で入手したデータを素材としている。第一に、2010年6月のA中学校の管理職(教頭)からの聞き取り調査、第二に、同年8月のA市教育委員会からの聞き取り調査、第三に、A中学校2年生(同年9月)のアンケート調査、である¹。主にこの第三のアンケート調査から統廃合に関わる項目を抽出して、分析を行った。

また第三のアンケート調査は、学校で配布し、生徒が家に持ち帰り記述し、学校で回収を行う留め置き式で行った。A中学校2年生の調査当時在籍していた61名のうち、54名分が回収できた。回収率が88.5%で、そのうち記述が十分でなかった1名分を除いた86.9%が有効回答率であった。

1 北海道の公立学校統廃合の現段階とA市の学校統廃合

安田隆子[2009]によれば、戦後の学校統廃合政策は三つの時期に区分される。その区分を援用するなら、近年(第3期)は国と地方自治体の財政状況問題に連動した形で政策が打ち出されている点に特徴がある。

典型的なものとして、財務省が所管する財政制度等審議会が2007年6月に公開した「平成20年度予算編成の基本方針」を上げることができるだろう。「基本方針」では、義務教育費を縮減するために、教職員給与の「効率化」とともに「学校統合の推進」が提言されている。義務教育費の縮減のためには、公立学校の統廃合が必要だという理解である²。

財務省は、これに先立つ平成19年度の予算執行において様々な調査を行っている。このひとつに「学校規模の最適化に関する調査」がある³。財務省が義務教育費の縮減政策を根拠づけるために「学校規模の最適化に関する調査」からどのような結論をひき出しているのかを、「平成19年度予算執行調査の結果について(要旨)」⁴の記述も合せて検討してみたい。

「学校規模の最適化に関する調査」は、元の学校が統廃合され平成17年4月に開校した全国の公立小中学校全て(221校)を、「全国の財務局ネットワークを活かして調査」したものである。調査結果は、以下のようになっている。

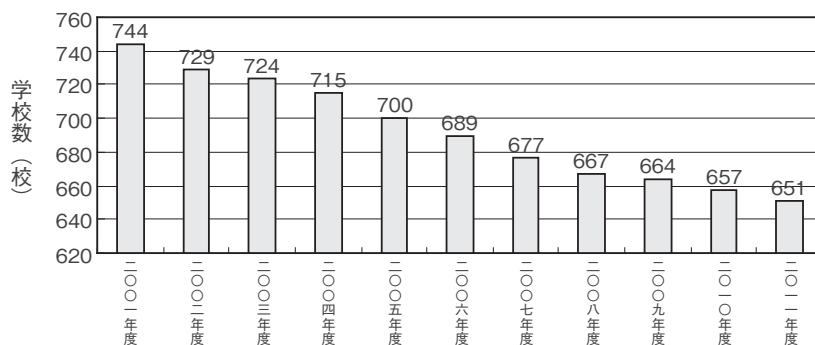
「①学校規模の適正化・教職員配置等の教育政策上の効果, ②保護者・子ども・設置者等の関係当事者の評価も肯定的(保護者・子どもの63.1%が肯定的評価, 否定的な評価は12.4%)であったことに加え, ③財政効率化が図られたこと(人件費を中心として, 統合前より小中合計で約170億円の効率化)等が実際のデータで明らかになった」(7頁)。

②の例として, 「保護者・生徒」の評価が上がっている。「友達がたくさんできる」(54.5%), 「クラス替えができる」(9.9%), 「行事やクラブ活動に活気」(8.0%)である。これについては本稿の課題との関係で後述する。③では, 527校を221校に減じ(306校を廃校)で教員数を35.8%減らすことができたこと, そしてその結果として学校運営費(国, 都道府県, 市区町村全体を合せたもの)を170億円削減する「効率化」が達成されたことを報告している。廃校となった学校1校あたり約5,600万円である。

この「効率化」が可能となった170億円のうち, 人件費は166億円(97.6%)を占める。「効率化」とは, ほとんど人件費の削減効果であると言える。教員数1名あたりにすると, 約690万円である。さらにこの資料の別の箇所を参照すると, 学校運営費の国, 都道府県, 市区町村の支出割合は, それぞれ28.2%, 56.5%, 15.3%となっていることがわかった。統廃合は, その意味で国だけではなく, 財政が逼迫する自治体にとって重要な選択肢のひとつとなりうることを示唆する。

ところで, 北海道においてもこの10年間で公立学校数は744校から651校へ減った。93校(12.5%)がなくなった(図表1)。急ピッチで学校数は減っている。

図表1 北海道の公立中学校の学校数の変化(出所:『学校基本調査報告書』各年度版から作成)



北海道では市町村といえども, 小さな都道府県レベルの広さがある場合も珍しくない。事例研究で対象としたA市の場合も, 東京都に匹敵する面積を擁するが, 小学校, 中学校, 高校が各1校しかない。北海道にある24市のなかで中学校が1校しかないのは, A市の他に1市あるだけである。

このように北海道においても, またここで取り上げるA市の場合も, 公立学校の統廃合は進められている。そして, 自治体財政の悪化が統廃合を進める動因となっていることも, 安田の時期区分の第三期の特徴に見事にあてはまる。

ところでA市は旧炭鉱地に所在する。炭鉱が最盛期であった1970年に, 中学校は9校あった。そこから炭鉱の閉山に伴って人口流出が続き, 中学校は1980年に8校, 1990年に6校となった。1990年には, A市で最後まで操業していた炭鉱が閉山した。中学校は, 2000年に5校

となった。そこから2010年までの10年間で、急ピッチに統廃合が進められた。2005年に4校、2008年に3校となった。そして2008年に、A市が深刻な財政危機に陥ることが確実になった時点で、財政支出削減の観点から2010年に3校を1校に統廃合することが計画され、実施された。そして現在、A市にはA中学校が1校あるだけとなった。

2010年の統廃合は学校体制の変更という面で、どうだったかについて確認しておこう。図表2がそれをみたものである。

図表2 学校統廃合による学校体制の変化

	学校数 (校)	生徒数 (名)	教員数 (名)					計 (名)
			校長	教頭	教諭	養護 教諭	事務 職員	
2009年	3	184	3	3	28	3	3	40
2010年	1	184	1	1	14	1	2	19
差	-2	0	-2	-2	-14	-2	-1	-21

※栄養教諭・栄養職員・用務員は除く。

資料出所：北海道教育委員会「空知の教育」平成21年度とA中学校学校要覧から作成。

2009年と2010年の比較として図表は作成してある。もとの三つの中学校（以降の記述で使用する関係で、B、C、D中学校と表記しておく）を統廃合し、新しい名称を冠するA中学校が誕生した。

ところで、三つの中学校の規模は異なっていた。B、C、D中学校の順に生徒数は、ほぼ1:1:2であった。最も規模の大きかったD中学校がB、C中学校を吸収する形である。そしてA中学校は、D中学校の校舎をそのまま引き継いだ。1学年の生徒数は約60名で、2クラス編成である。生徒数は、統廃合前後で184名と変わっていない。

他方で、教員数は半減している。管理職を除いた教員で、28名から14名に半減した。A中学校管理職は、この教員数（14名）についても、「生徒指導加配」や統廃合という「緊急事態」への措置としての「加配」の2名を加えて、やっと達成したものだと言っていた。A中学校は、時間割において教科枠で1週間に28時限を展開している。1教員の担当する時間数は、平均20時限分になっているという。これは統廃合前には、多くても15時限分だったことと比べて、著しい負担増になったと評価していた。確かに、校務分掌的には統廃合によって整理される仕事もあったが、授業時間数の増加や教員の空き時間の減少で、研修等も格段に行いにくくなっているようだ。

このように統廃合は、教員数の劇的な減少を可能にした。そして前述した統廃合による支出削減の効果を、A中学校の事例に直接当てはめて試算してみると、人件費ベースで、約1.4億円の支出削減が達成されたことになる。そのうち道は8,200万円を、市は約2,200万円の歳出が削減できた計算になる。

2 学校統廃合でもちだされる「教育効果」と先行研究の現状

統廃合を推進する場合、地域向けや保護者向けに、統廃合には「良い影響」があるという説

明が一般的に持ち出されている。

前述した財政制度等審議会の「平成20年度予算編成の基本方針」においても、義務教育費の縮減のために「学校統合の推進」が提言されていた。本稿が注目するのは、この財政的な狙いとは別に、統廃合が学校に「良い影響」をもたらすという説明が、財務省の行った調査結果をもとに行われ、統廃合の過程で保護者の同意を調達する上で一定の役割を果たしているという事実である。

前述の「平成20年度予算編成の基本方針」でも「学校規模の最適化に関する調査（暫定版）」が添付され、そこでは小規模校を統合したことによる「良い影響」が、学校・設置者と保護者・児童・生徒と分けて記述されている。

学校・設置者では、大きく言って「適正規模での教育」が評価されている。保護者・児童・生徒では、「友達がたくさんできる」(56.8%),「クラス替えが可能」(8.2%),「行事を大勢で行うことが可能」(7.7%)等となっている⁵。後述の分析の関係で、友人関係への期待が大きな位置を占めていることを強調しておきたい。しかし学習面では、「勉強をやる気になっている」のみが上がるにとどまり、それも4.4%を占めているにすぎない。

このような統合によって生まれる規模（の大きさ）がもつ「良い影響」についての理解は、中央教育審議会「小・中学校の設置・運営の在り方等に関する作業部会」の「小・中学校の適正配置に関するこれまでの主な意見等の整理」においてもみられる⁶。例えば、「一定の規模がある学校では、子どもが集団の中で切磋琢磨することなどを通じて、一人一人の資質や能力をさらに伸ばしやすいという利点がある」という理解である。具体的に上げると、「規模のある学校」の利点は、「人間関係に配慮したクラス編成」、「多様な指導形態」、「スポーツでのクラス対抗戦」、「多くの種目での部活」が可能であること、である。

聞き取り調査においてA市教育委員会も、統廃合の理由として、財政的な問題への対処から統廃合を進めているのではなく、「規模のある学校」の利点を活かすために統合したと説明していた。

そして、保護者も「規模のある学校」に期待していた。「第32回北海道こどもの本のつどいA大会 第9分科会『地域—Aの子どもの未来』アンケート調査報告書（中間報告）」⁷でも、「規模のある学校」への期待が保護者にある程度浸透していたことがわかる。例えば、自由記述欄からそれを上げてみよう。

- ・「統合によって地域に学校がなくなるのは悲しいことではあるが、学校がまとまることで子どもの人数が増え、様々な活動を行うのによい環境になると思う。」(中学校保護者、下線は引用者。以下同様)
- ・「統合は親子ともとても楽しみにしている。友達の幅も広がるし、今よりも自分の子どもにあった友達ができるかもしれないと思っている。」

問題は、このような保護者の期待は実現されたのか、にある。少なくとも「規模のある学校」の「良い影響」は、「学校規模の最適化に関する調査」でも児童・生徒の人数が増えることの直接的な利点の理解に止まっている。「切磋琢磨」を通じて、「資質や能力」を伸ばすという直接的な利点を越える飛躍した期待は、一部に止まっている。

他方で、公立学校の統廃合に関する研究は、若林敬子 [1999]を始めとして少なくはない。しかしその研究は、統廃合過程における諸問題、例えば地域コミュニティとの関わり等の教

育行財政問題を焦点としたものであり、本稿で検討を試みるような、統廃合が児童や生徒にどのような影響をもたらしたのか、という点の解明を課題としたものは限られる⁸。先行研究では、統廃合前において、その是非の考察に焦点があり、統廃合後にその影響を引き受けるしかない児童や生徒の問題は視野に入らなかったからなのではないか、と推察される。管見の限りでは金子泰之〔2011〕のものが唯一の研究であった。

金子は、統廃合の生徒への影響を、縦断的な視点を重視し、中学生のどの時点(1～3年)で統廃合を経験したのかの点で異なる三つの「世代」の比較を行った。そしてその結果、「抑うつ不安」、「学校享受感」、「学校アイデンティティ」そして「学級の雰囲気の違いがみられるか」を比較し、「世代」によって学校生活への適応可能性に差があることを論じた。

ところで葉養正明も〔2006〕において、統廃合と学校規模の関係について検討している。統廃合の根拠となっている「規模のある学校」論の「教育効果」は限定的であるという主張だ。「ダグラス・スミス曲線なども提示され(1982年)、学級規模が20人以下に減少すると教育効果が拡大する」という反証がなされていると述べている(190頁)。しかしながら、この貴重な主張も、小規模校のもつ良い教育効果へ注目したという点に止まり、本稿で課題とする統廃合が、統合前／統合後の差異を通して、どのような影響を生徒へもたらしたのかを明らかにしたものではない。

このように統廃合の生徒への影響についての研究は乏しい。本稿は、それを明らかにするものである。

3 アンケート分析の方法と課題

本稿は、統廃合後の中学生の生活と意識を、統廃合の影響という観点から検討する。具体的には、統廃合半年後に、生徒が学校での新たな生活に直面する中で、「学校生活の変化」をどのように理解、あるいは評価しているのかを明らかにする。金子との対比で本稿の特徴を強調しておく。半年後という一時点からの回顧的研究という限界をもつ。しかし、心理面に限定された視角から生徒の状況を評価するのではなく、生徒の統合前／統合後の学校生活の差異の観察に焦点をあてる。何が変わったと生徒は評価したのか、どこに困難を感じているのか、そして新しい学校生活に慣れるためにどんな努力が必要となったのか、これらの一連の生徒にとっての統廃合の意味を明らかにする。

分析視角は、二つある。第一に、前述したように、生徒が学校統廃合の経験の評価する枠組みは、統合前／統合後の学校生活の差異の観察に基づくから、「学校経路」の違いに注目する。学校統廃合といっても、どの中学校からどの中学校へ移動したのかという具体的な「学校経路」を考慮しなければ、生徒の評価は理解できないだろう。そしてA市の統廃合を考える上では、A市が抱えていた地域社会の大きな違い(これには保護者の階層的な差異も重なる)があったことも考慮しなければならない。このような理由で、生徒の学校統廃合経験の評価を解釈する枠組みとして、統合前に所属していたどの中学校からA中学校への移動したのか、すなわち「学校経路」の違いに注目する。

第二に、生徒の学校統廃合経験の評価を解釈する枠組みとして女子／男子の違い、すなわ

ち「性別」に注目する。中学生は一般的にも男女差が大きいことで知られている。特に中学生の友人関係に性差が影響するという点に関して、二神多栄・神谷ゆかり [2002] に詳しいが、統廃合が友人関係に大きな影響を与えることを考慮すると、統廃合経験の評価にも、当然影響を与えることが想定される。

以上の二つの分析視角から、中学生の統廃合経験を分析する。

4 学校統廃合前の出身中学校の違い

前述したようにアンケート調査は、統廃合から半年経った9月に行われた。アンケート調査の対象者は、現A中学校2年生53名で、男子生徒は23名、女子生徒が30名であった。生徒にとっては、出身中学での生活もそう昔のことではない。そして、出身中学校の校区には無視できない地域差があった。分析を開始する前に、出身中学校B、C、Dの各中学校出身者にどのような違いがあるのかについて、最小限の確認をしておく。

(1) 背景となる地域差

出身中学校の違いとして表れる地域差は、次のようなものである。B中学校は、A市の中心部に位置する中学校であった。C中学校はA市南部の農村地帯にある中学校であった。D中学校は位置的にA市の中央部に位置していた。A市は炭鉱閉山によって生じる産業の空白を埋めるために工業団地を造営したが、これはD中学校の校区内にあった。

A市は、将来的な都市計画として、山間に分散した集落から構成されるA市を人口減に対応した形へ集約する「コンパクト・シティー構想」をもっている。この構想では、新しい市の中心をD中学校校区におくことを想定している。そのこともあって、D中学校を母体としてA中学校に統合した。ちなみに、2011年に6校を統廃合して誕生したただ1校となった小学校も、唯一の高校もD中学校校区にある。

まず、出身中学校別に家族形態をみておこう(図表3)。

図表3 出身中学校別家族形態

		家族形態						合計
		核家族	母子家族	三世代家族 (親子が 母子のみ の場合を 含まず)	三世代家族 (母子のみ)	祖父母	その他	
B中学校	度数(名)	7	1	5	0	0	0	13
	内訳(%)	53.8	7.7	38.5	0.0	0.0	0.0	100.0
C中学校	度数(名)	4	2	3	2	0	1	12
	内訳(%)	33.3	16.7	25.0	16.7	0.0	8.3	100.0
D中学校	度数(名)	18	1	1	5	1	0	26
	内訳(%)	69.2	3.8	3.8	19.2	3.8	0.0	100.0
合計	度数(名)	29	4	9	7	1	1	51
	内訳(%)	56.9	7.8	17.6	13.7	2.0	2.0	100.0

資料出所：A中学校アンケート調査から作成。以下、同様。

家族形態として、親子のみからなる核家族と母子家族、これに祖父母世代を加えた三世代家族（親子世代の部分で核家族と母子家族を区別した）、親世代がおらず生徒と祖父母からなる家族、そしてこれに当たらない家族を区別した。

全体としては、核家族が6割を占めるが、三世代家族も多い。そして母子家族もあるが、祖父母も同居している形をとっている場合が多い。

B中学校出身者は、核家族かそれに祖父母が加わった家族構成の場合がほとんどである。B中学校校区は、A市の中心地域にあった。そのため保護者の職業は、市役所や現在では少なくなったが事業所の支店等で管理的、事務的職業に従事している場合も多い。C中学校出身者は、三世代家族の比率が大きい。C中学校校区は農村地域にあったので、家族形態にも特徴がでている。そして相対的に母子家族の比率が高い。D中学校出身者は、核家族が最多である。工業団地に近接し、生産現場で働く雇用者が多い地域であるという特徴が表れている。母子家族の場合も、三世代の構成をとっている場合が多い。

このような地域的な家族的背景の違いは、生徒の将来展望を経由し、学校の学習への取り組みにも影響を与えている。

生徒の中学校卒業後の進路希望を出身中学別にみたものが図表4である。

図表4 統合前の学校別進路希望

		進学希望					合計	
		7. まだ決めていない	1. 高校まで	4. 専門学校まで	3. 短大まで	2. 四年制大学まで		5. 大学院まで
B中学校	度数(名)	6	3	1	0	4	0	14
	内訳(%)	42.9	21.4	7.1	0.0	28.6	0.0	100.0
C中学校	度数(名)	6	2	2	1	2	0	13
	内訳(%)	46.2	15.4	15.4	7.7	15.4	0.0	100.0
D中学校	度数(名)	15	7	2	0	1	1	26
	内訳(%)	57.7	26.9	7.7	0.0	3.8	3.8	100.0
合計	度数(名)	27	12	5	1	7	1	53
	内訳(%)	50.9	22.6	9.4	1.9	13.2	1.9	100.0

中学校2年生なので「7.まだ決めていない」も多い。それ以外では、「1.高校まで」を最多とし、「2.四年制大学まで」、「4.専門学校まで」の順となっている。これも出身中学校で違いがあった。「7.まだ決めていない」の多さはB、C、Dの順に多くなっている。また、「2.四年制大学まで」の多さはその逆順である。また、図表は省略したが、男女差も若干あった。女子生徒で「7.まだ決めていない」が多く、その分「1.高校まで」が少ないという差である。しかし、高校以降の進学希望には男女差はほとんどない。

そして、この進路希望の差は当然、生徒の学習モチベーションの違いとしても結果している。学校管理職の聞き取りにおいても、北海道で行われる学力テスト（300点満点）において、各中学校出身者の平均点は20点ほどの違いがあるとのことであった。D、C、Bの順に高くなる。すなわち小規模校出身者の方が、学力が高い。B、C中学校が、小規模校ならではの学習課程上の工夫を行ってきた歴史も関係していた。ここでは図表を掲げることはしないが、生徒の成績の自己評価においても、この差は確認できた。

そして成績の自己評価において、男女差が大きいことも特徴的である。男子生徒は、成績評価がシビアではなく、5段階に分けて聞いた「3.真ん中」に集中する。女子生徒は、5段階にまんべんなく散らばり、自分の成績を他者との比較においてリアルに把握していた。

(2) 統廃合の通学への影響

中学校が統廃合されることにより、生徒の生活は変わるようになった。まず、より客観的な変化から確認してゆく。

A市で中学校の統廃合が問題になった時に、保護者の中で最も不安があったのは通学についてであった。A市の広さゆえの長時間通学への不安に加えて、通学方法の不安もあった。統廃合で通学距離が長くなった場合、一般的にはスクールバスが使用されることが多いが、A市では路線バスを使用することになったからである。財政的観点からスクールバスの使用が見送られた経緯がある。路線バスの使用の方が「安上がり」であり、路線バスの会社にとっても乗客を確保することで路線の廃止等を防ぐことができるという理由からであった。このような経緯で、生徒は路線バスで通学することになった。さらに路線バスの場合、本数の問題もある。A中学校管理職は、路線バスの使用によって、バスの時刻表に教育課程が縛られてしまうことの問題を指摘していた。

図表5が、通学方法別に通学時間をみたものである。

図表5 通学方法別の通学時間 (片道分)

		通学時間						合計	
		10分未満	10～20分	21～30分	31～40分	41～50分	51～60分	度数	内訳 (%)
通学方法(行きのみ)	徒歩(名)	3	8	4	5	3	0	23	46.0
	バス(名)	0	2	7	8	7	1	25	50.0
	保護者の車(名)	0	1	1	0	0	0	2	4.0
合計 (名)		3	11	12	13	10	1	50	100.0
内訳 (%)		6.0	22.0	24.0	26.0	20.0	2.0	100.0	

通学方法は、多い順にバス、徒歩、そして例外的に保護者の車であった。B、C中学校出身者は、ほぼ全員がバス通学であった。ところでこのバス通学の中に、30分以上かかる生徒が16名もいることに注意してほしい。しかしながら生徒が、バス通学での不安として上げていたのは、時間のこと(長時間)ではない。本数が少ないことからくる「乗り遅れ」であった。他方、徒歩通学はD中学出身者の通学方法であったが、通学時間が比較的長い生徒も多かった。

この長い通学時間のため、生徒の起床時間と就寝時間は共に早い。ここでは、起床時間のみのデータを掲げておく。ほとんどの生徒が6時台に起床している。6時半までに起床する生徒は、約半数である。そのため、就寝時間も早くなっている。午後11時までに、7割を超える生徒が就寝している。朝が早いことの影響である。そして睡眠時間を増やしたいと思っている生徒は、四分の三を超えている。

5 統廃合によって変化したこと

次の順序で、統廃合によって生徒にとって何が変わったのかをみる。まず、現在の学校生活そのものの全体的な評価を、学校へ通う「楽しみ」と「気がかり」の有無とその内容から検討する。続いて、統廃合によって変わったと感じていることを、幾つかの側面から検討する。最後に、各側面の関係を明らかにする。分析視角に、「学校経路」と性別の二つの差異を用いている。

(1) 学校へ通う「楽しみ」の変化

まず、生徒が学校へ「楽しみ」を見出して通学しているのか、その変化を二段階に分けて検討をする。まずは「楽しみ」の有無の変化を、次いでその内容の変化を検討する。

学校へ通う「楽しみ」の有無の変化をみたのが、図表6である。

図表6 学校での「楽しみ」の有無の変化

		a以前の学校での 楽しみの有無		b現在の学校での 楽しみの有無		楽しみ有 の変化 (b2-a2)
		1. 楽し みはな かった	2. 楽し みはあ った	1. 楽し みはな い	2. 楽し みはある	
B中学校	度数(名)	1	13	0	14	1
	内訳(%)	7.1	92.9	0.0	100.0	7.1
C中学校	度数(名)	3	10	0	13	3
	内訳(%)	23.1	76.9	0.0	100.0	23.1
D中学校	度数(名)	6	20	1	25	5
	内訳(%)	23.1	76.9	3.8	96.2	19.2
合計	度数(名)	10	43	1	52	9
	内訳(%)	18.9	81.1	1.9	98.1	17.0

まず、統廃合によって学校に「楽しみ」を見出すようになった生徒が増えたことが指摘できる。「以前の学校での楽しみの有無」では、「楽しみはなかった」と答えた生徒が2割ほどいた。C、D中学校は2割を少し超えていた。それが、現在のA中学校になって学校に「楽しみ」を見出せるようになっていた。この「楽しみ」の有無には男女差がない。

さらに「楽しみ」が〈あった／ある〉と回答した生徒に、その内容を10項目から選択してもらった⁹。統廃合前後の学校で共通して支持の最も多いものは、「7.友だちと過ごす時間」で8割を超えている。これに「6.休み時間」の7割、「2.部活動」の5割が続く。総じて出身中学校での「楽しみ」と、新中学校でのその傾向は似ている。共に、「友だちと過ごす時間」が最も多く、次いで「休み時間」が多い。すなわち、友人という時が楽しみなのである。しかし、上げられた項目をみる限り、統廃合を経て増加したものはごくわずかにとどまり、その量も小さい。ほとんどの項目は減っている。図表7は、変化があったもの限定して取り上げた。

図表7 学校生活での楽しみ(複数回答)の変化

			a. 以前の 学校での楽 しみ	b. 現在の 学校での楽 しみ	変化 (b-a)
5. 給 食	B中学校	内訳(%)	38.5	14.3	-24.2
	C中学校	内訳(%)	40.0	30.8	-9.2
	D中学校	内訳(%)	45.0	28.0	-17.0
	平均	内訳(%)	41.9	25.0	-16.9
4. 学 校 行 事	B中学校	内訳(%)	53.8	42.9	-10.9
	C中学校	内訳(%)	50.0	23.1	-26.9
	D中学校	内訳(%)	50.0	52.0	2.0
	平均	内訳(%)	51.2	42.3	-8.9
7. 友 だ ち と 過 ご す 時 間	B中学校	内訳(%)	100.0	100.0	0.0
	C中学校	内訳(%)	90.0	69.2	-20.8
	D中学校	内訳(%)	75.0	80.0	5.0
	平均	内訳(%)	86.0	82.7	-3.3
6. 休 み 時 間	B中学校	内訳(%)	69.2	64.3	-4.9
	C中学校	内訳(%)	90.0	76.9	-13.1
	D中学校	内訳(%)	70.0	72.0	2.0
	平均	内訳(%)	74.4	71.2	-3.2

※「楽しみ」があった/ある生徒数(母数)について、各項目の選択数をこの母数で除し算出。母数が異なるので内訳(%)のみを表記。

最も大きく率を減らしたのが、「5.給食」である(-16.9%)。そして「4.学校行事」が続く(-8.9%)。「楽しみ」として最も支持の高かった「7.友だちと過ごす時間」もわずかではあるが減少している(-3.3%)。「6.休み時間」も同様である(-3.2%)。

このように、「楽しみ」として総括的な聞き方をすると増加しているが、その内容を具体的に聞くと、個々の「楽しみ」は減少しているという結果になった。増加した全体的な「楽しみ」は、個々の内容に還元できない漠然とした期待のようなものかもしれない。

そして出身学校別の内訳をみても分かるように、出身学校による違いが顕著である。特にC中学校において、「楽しみ」として上げられることは減っている。

出身中学校と新中学校の「楽しみ」の差異は、具体的な場面、「給食」と「学校行事」に表れる。この差異は、「友だち」という特定の者と「過ごす」、すなわち選択的な人間関係のもとで過ごす時間と、クラスという選択の余地のない場面での人間関係のもとで過ごす時間の違いを意味している可能性がある。

(2) 学校での「気がかり」の変化

次に、生徒が学校にどのような「気がかり」を感じていたのか、統合前後で比較する。まずは、「気がかり」の有無の比較である。次いで、その内容を比較する。

出身学校別に学校での「気がかり」の有無の変化をみたのが、図表8である。

図表8 学校での「気がかり」の有無の変化(出身中学校別)

		a以前の学校での「気がかり」の有無		b現在の学校での「気がかり」の有無		学校での「気がかり」有の変化(b2-a2)
		1.気がかりなことはなかった	2.気がかりなことがあった	1.気がかりなことはない	2.気がかりなことがある	
B中学校	度数(名)	5	9	5	9	0
	内訳(%)	35.7	64.3	35.7	64.3	0.0
C中学校	度数(名)	6	7	8	5	-2
	内訳(%)	46.2	53.8	61.5	38.5	-15.4
D中学校	度数(名)	13	12	14	11	-1
	内訳(%)	52.0	48.0	56.0	44.0	-4.0
合計	度数(名)	24	28	27	25	-3
	内訳(%)	46.2	53.8	51.9	48.1	-5.8

約半数の生徒が出身中学校でも「気がかり」をもっていたし、新中学校においても同様である。しかし、統廃合によってそれはわずかではあるが減っている(-5.8%)。

出身中学校時代の「気がかり」は、学校差が大きい。D、C、Bの順に多くなっている。B中学校では、およそ三分の二の生徒が「気がかり」を抱えていた(64.3%)。しかも出身中学校時代と現在の学校生活では変化がない。C中学校出身者の「気がかり」は減っている(-15.4%)。D中学校出身者も、わずかであるが減っている(-4.0%)。

前述した学校生活の「楽しみ」と比較して考えると、C中学校は「楽しみ」が増え、「気がかり」が減った。すなわち統廃合は、学校生活に好影響を与えたと言える。D中学校でも、その程度は低くなるが類似の傾向が見出せる。しかし、B中学校においてはそのような変化はなかった。

図表9 出身中学校時代の「気がかり」の有無の変化(男女別)

		a以前の学校での「気がかり」の有無		b現在の学校での「気がかり」の有無		学校での「気がかり」有の変化(b2-a2)
		1.気がかりなことはなかった	2.気がかりなことがあった	1.気がかりなことはない	2.気がかりなことがある	
男子	度数(名)	14	8	17	5	-3
	内訳(%)	63.6	36.4	77.3	22.7	-13.6
女子	度数(名)	10	20	10	20	0
	内訳(%)	33.3	66.7	33.3	66.7	0.0
全体	度数(名)	24	28	27	25	-3
	内訳(%)	46.2	53.8	51.9	48.1	-5.8

さらに男女別に検討してみる(図表9)。図表から分かるのは、学校生活における「気がかり」は女子生徒の多くが抱え統廃合前後で変わりがないこと、そして前述したような「気がかり」の減少は、男子生徒のみにあてはまるものであることである。

ところで、「気がかり」が〈あった／ある〉生徒に、「気がかり」の具体的な内容を15項目から上げてもらった¹⁰。「気がかり」が〈あった／ある〉生徒の場合、統廃合後に個別具体的な「気がかり」は増えている。「楽しみ」の分析と同様に、総括的な聞き方と、該当する生徒の

具体的な項目選択には開きがある。「楽しみ」をもつ生徒の場合、個別具体的な「楽しみ」は少なくなっていた。そして「気がかり」を抱える生徒の場合、個別具体的な「気がかり」は深まっている。

個別具体的な学校生活の「気がかり」は、「5.友人関係」、そして「1.勉強のこと」と「8.成績のこと」にある。そして深まっている。図表10に、出身中学校別に変化の大きなものを掲げておく。

図表10 学校生活での気がかり（複数回答）の変化（出身中学校別）

〈勉強・成績〉			a以前の学校で気がかりだったこと	b現在の学校で気がかりなこと	変化(b-a)
1.勉強のこと	B中学校	内訳(%)	44.4	60.0	15.6
	C中学校	内訳(%)	28.6	60.0	31.4
	D中学校	内訳(%)	25.0	63.6	38.6
	平均	内訳(%)	32.1	61.5	29.4
8.成績のこと	B中学校	内訳(%)	44.4	50.0	5.6
	C中学校	内訳(%)	28.6	80.0	51.4
	D中学校	内訳(%)	33.3	63.6	30.3
	平均	内訳(%)	35.7	61.5	25.8
〈クラス・友人関係〉					
4.クラスのこと	B中学校	内訳(%)	22.2	30.0	7.8
	C中学校	内訳(%)	14.3	60.0	45.7
	D中学校	内訳(%)	50.0	45.5	-4.5
	平均	内訳(%)	32.1	42.3	10.2
5.友人関係	B中学校	内訳(%)	55.6	70.0	14.4
	C中学校	内訳(%)	28.6	60.0	31.4
	D中学校	内訳(%)	58.3	54.5	-3.8
	平均	内訳(%)	50.0	61.5	11.5

※「気がかり」があった/ある生徒数(母数)について、各項目の選択数をこの母数で除し算出。母数が異なるので内訳(%)のみを表記。

特に、全体としても「1.勉強のこと」や「8.成績のこと」で「気がかり」が選択される率は増えた(それぞれ29.4%と25.8%)。これに「9.将来のこと」を加えてもよいだろう。そして「4.クラスのこと」や「5.友人関係」に関わる「気がかり」も増えた(それぞれ10.2%と11.5%)。

出身中学校の違いも大きい。C、D中学校出身者の現在の学校生活での「気がかり」は、「1.勉強のこと」や「8.成績のこと」という学習面で大きくなっている。これには、前述した出身中学校の学力差も関わっているだろう。

そしてC中学校出身者の学校生活での「気がかり」は、「4.クラスのこと」や「5.友人関係」という対人関係面においても大きくなっている。B中学校出身者でも、程度は下がるが同様である。逆にD中学校出身者は若干ではあるが、この点での「気がかり」を減らしている。

以上のように、学校生活の「気がかり」は、統廃合前後であまり差がない。およそ半数の生徒が抱え、女子生徒に多い。さらに、出身中学校によって大きな差があった。「気がかり」がある場合、深まったのは、圧倒的に勉強や成績という学習面においてである。出身中学校の学力差が関わっている。そしてC中学校出身者は、対人関係面で「気がかり」を深めた。

男女別に再集計したものが、図表11である。

図表11 学校生活での気がかり(複数回答)の変化(男女別)

〈勉強・成績・進路〉			a以前の学 校で気が かりだった こと	b現在の学 校で気が かりなこと	変化(b-a)
1.勉強の こと	男子	内訳(%)	25.0	60.0	35.0
	女子	内訳(%)	35.0	61.9	26.9
	平均	内訳(%)	32.1	61.5	29.4
8.成績の こと	男子	内訳(%)	50.0	80.0	30.0
	女子	内訳(%)	30.0	57.1	27.1
	平均	内訳(%)	35.7	61.5	25.8
〈クラス・友人関係〉					
4.クラス のこと	男子	内訳(%)	25.0	40.0	15.0
	女子	内訳(%)	35.0	42.9	7.9
	平均	内訳(%)	32.1	42.3	10.2
5.友人関 係	男子	内訳(%)	25.0	40.0	15.0
	女子	内訳(%)	60.0	66.7	6.7
	平均	内訳(%)	50.0	61.5	11.5

※ 算出の仕方は図表10と同様。

図表から見る限り、「気がかり」がある男子生徒の場合、個別具体的な「気がかり」は、若干だが女子生徒よりも増えていることがわかる。「気がかり」の有無の点では減少させていたが、個別具体的な「気がかり」では深めている。特に学習面に顕著である。

ここまですとまとめると、総括的な意味での「楽しみ」や「気がかり」という点からみる統廃合は良い影響を及ぼしていると言えそうだ。しかし「学校経路」や性別によってかなり異なっている。そして、それぞれの個別具体的な内容のレベルでは、食い違う様相をみせる。「楽しみ」がある生徒の場合も、個別具体的な「楽しみ」をあまり上げられないようになった。「気がかり」がある生徒の場合、「気がかり」を深めている。特に学習面で顕著である。また、「学校経路」や性別によって、「気がかり」を深める程度も異なっている。

(3) 統廃合によって変化したこと

この項では、統廃合によって変化したことを生徒に聞いたアンケートの項目を分析する¹¹。この中から前項の分析結果、個別具体的な「気がかり」の分析を参考に、「i.学習面での変化」、「ii.先生との関係の変化」、「iii.クラス等での対人関係の変化」、「iv.友人関係での変化」、「v.自分自身の変化」に焦点をあてて、二つの分析視角から比較する。

i. 学習面での評価

生徒の学習面での変化の評価を2段階で検討する。各質問項目の大きな変化を押さえた上で、幾つかの項目に絞り込んで、二つの分析視角から比較するという順序である。

まず、A～Cの三つの質問項目で変化の方向性を押さえておく。図表12の、表頭部分が具体的な選択肢になる。また「全体的な変化」として、例えば「3.増えた」から「1.減った」を引いたものも計算した。

図表12 統合による変化(学習関係)

			1.減った/ 低くなった	2.変わらない	3.増えた/ 高くなった	計	全体的変化 (3-1)
学 習 関 係	A. 授業での発表回数	度数(名)	13	33	7	53	-6
		内訳(%)	24.5	62.3	13.2	100.0	-11.3
	B. 授業での理解度	度数(名)	14	35	4	53	-10
		内訳(%)	26.4	66.0	7.5	100.0	-18.9
	C. 勉強でライバルとなる 友だちの数	度数(名)	3	40	9	52	6
		内訳(%)	5.8	76.9	17.3	100.0	11.5

まず全体としては、「2.変わらない」を選択した生徒が6割を超えている。そして「A.授業の発表回数」が増えた生徒と減った生徒を比較すると、「1.減った」と答えた生徒の方が11.3%多い。「B.授業の理解度」でも同様である(-18.9%)。およそ四分の一の生徒が「B.授業の理解度」が「1.低くなった」と回答している。そして「C.勉強でライバルとなる友だちの数」は、「3.増えた」と答える生徒が多くなっている(11.5%)。

このうち「A.授業の発表回数」と「B.授業の理解度」に限定して、男女別、出身学校別の違いを検討する。図表は、男女別に出身中学と選択肢をクロスしてある。このように図表を作成したため、各セルの度数は小さく、パーセントは誇張されているので以下の記述ではパーセントの表記を省略する。

まず「A.授業の発表回数」である(図表13・14)。

図表13 学校別「A.授業での発表回数」の変化(女子のみ) 図表14 学校別「A.授業での発表回数」の変化(男子のみ)

		「A.授業での発表回数」の変化			合計
		1.減った	2.変わらない	3.増えた	
B中学校	度数(名)	5	2	2	9
	内訳(%)	55.6	22.2	22.2	100.0
C中学校	度数(名)	0	7	1	8
	内訳(%)	0.0	87.5	12.5	100.0
D中学校	度数(名)	2	7	4	13
	内訳(%)	15.4	53.8	30.8	100.0
合計		7	16	7	30
		23.3	53.3	23.3	100.0

		「A.授業での発表回数」の変化			合計
		1.減った	2.変わらない	3.増えた	
B中学校	度数(名)	0	5	0	5
	内訳(%)	0.0	100.0	0.0	100.0
C中学校	度数(名)	3	2	0	5
	内訳(%)	60.0	40.0	0.0	100.0
D中学校	度数(名)	3	10	0	13
	内訳(%)	23.1	76.9	0.0	100.0
合計		6	17	0	23
		26.1	73.9	0.0	100.0

授業の発表回数は、全体的として女子生徒に変化が大きい。さらに細かな違いをみてゆく。

女子生徒は、B中学校で多くが「1.減った」を選択している。同様の影響は、B中学校の男子生徒にはみられない。そして男子生徒においては、C中学校の生徒の多くが「1.減った」を選択している。同様の影響は女子生徒にはみられない。D中学校は男女とも「1.減った」を選択した生徒はいるが相対的には少ない。そして重要なのは、統廃合を機に授業の発表回数を一部の女子生徒が増やしているということである。女子生徒は、「A.授業の発表回数」という点からみれば、行動を分化させた。他方で男子生徒は、発表回数を減らすだけになっている。

次に「B.授業の理解度」を検討する(図表15・16)

図表15 学校別「授業での理解度」の変化(女子のみ)

		「B.授業での理解度」の変化			合計
		1.低く なった	2.変わ らない	3.高く なった	
B中学校	度数(名)	5	4	0	9
	内訳(%)	55.6	44.4	0.0	100.0
C中学校	度数(名)	5	2	1	8
	内訳(%)	62.5	25.0	12.5	100.0
D中学校	度数(名)	0	11	2	13
	内訳(%)	0.0	84.6	15.4	100.0
合計	度数(名)	10	17	3	30
	内訳(%)	33.3	56.7	10.0	100.0

図表16 学校別「授業での理解度」の変化(男子のみ)

		「B.授業での理解度」の変化			合計
		1.低く なった	2.変わ らない	3.高く なった	
B中学校	度数(名)	1	4	0	5
	内訳(%)	20.0	80.0	0.0	100.0
C中学校	度数(名)	1	4	0	5
	内訳(%)	20.0	80.0	0.0	100.0
D中学校	度数(名)	2	10	1	13
	内訳(%)	15.4	76.9	7.7	100.0
合計	度数(名)	4	18	1	23
	内訳(%)	17.4	78.3	4.3	100.0

全体として「B.授業の理解度」で「1.低くなった」を選択した生徒が多いが、これも男女差、出身学校差が大きい。

女子生徒では、B、C中学校出身者の多くが「1.低くなった」を選択している。D中学校では全くそのようなことはない。男子生徒にも、女子生徒より少ないが「1.低くなった」と答えた生徒がいる。すなわち、「B.授業の理解度」が低下したと考えた生徒はB、C中学校出身者において、とりわけ女子生徒に多い。D中学校出身者と対比をみせる。

このように学習面において統廃合は、好ましくない影響を与えている。そして、男女差、出身中学校の差が大きい。特に、女子生徒は成績を非常に気にしていることを前述したが、学習面における統廃合の影響を、否定的に感じている。

ii. 先生との関係の面での評価

続いて先生との関係の変化をみる。生徒あたりの教員数は減っているから、当然、関係も希薄になっていることが予想される。統合による変化のうち先生との関係をみたものが図表17である。

図表17 統合による変化(先生との関係)

			1.浅くなった/ 減った/気をつ かわなくなった	2.変わらない	3.深まった/ 増えた/気をつ かうようになった	計	変化(3-1)
先生 につ いて	L.先生との親密度	度数(名)	7	42	4	53	-3
		内訳(%)	13.2	79.2	7.5	100.0	-5.7
	O.先生と会話する機会	度数(名)	8	35	10	53	2
		内訳(%)	15.1	66.0	18.9	100.0	3.8
	P.先生への気づかい	度数(名)	0	52	1	53	1
		内訳(%)	0.0	98.1	1.9	100.0	1.9

全体としては、「2.変わらない」の選択が多い結果となった。しかし、個別の項目をみると変化がある。特に、「O.先生と会話する機会」は「3.増えた」と考える生徒は18.9%いるが、「1.減った」と考える生徒も15.1%いる。両方向の変化である。「L.先生との親密度」では、「1.浅くなった」の方が多い。「1.浅くなった」は13.2%ある。全体的にはそれほど顕著ではないが、やはり先生との関係は相対的に希薄になったと評価している。

そして、これには出身学校の差が大きく影響している。「O.先生と会話する機会」と「L.先生との親密度」に限定して、男女別、出身学校別に検討する。

まず「O.先生と会話する機会」を検討する(図表18・19)。

図表18 学校別「O.先生と会話する機会」の変化(女子のみ)

		「O.先生と会話する機会」の変化			合計
		1.減った	2.変わらない	3.増えた	
B中学校	度数(名)	3	5	1	9
	内訳(%)	33.3	55.6	11.1	100.0
C中学校	度数(名)	2	4	2	8
	内訳(%)	25.0	50.0	25.0	100.0
D中学校	度数(名)	0	7	6	13
	内訳(%)	0.0	53.8	46.2	100.0
合計	度数(名)	5	16	9	30
	内訳(%)	16.7	53.3	30.0	100.0

図表19 学校別「O.先生と会話する機会」の変化(男子のみ)

		「O.先生と会話する機会」の変化			合計
		1.減った	2.変わらない	3.増えた	
B中学校	度数(名)	1	3	1	5
	内訳(%)	20.0	60.0	20.0	100.0
C中学校	度数(名)	2	2	1	5
	内訳(%)	40.0	40.0	20.0	100.0
D中学校	度数(名)	0	13	0	13
	内訳(%)	0.0	100.0	0.0	100.0
合計	度数(名)	3	19	1	23
	内訳(%)	13.0	82.6	4.3	100.0

「O.先生と会話する機会」で「1.減った」を選択した生徒が多いのは、B、C中学校である。そして「1.減った」を選択した生徒は、B中学校出身の女子生徒とC中学校出身の男子生徒で多い。逆に、D中学校出身の女子生徒は「3.増えた」が多くなる。複雑な動きとなっている。

次に「L.先生との親密度」を検討する(図表20・21)。

図表20 学校別「L.先生との親密度」の変化(女子のみ)

		「L.先生との親密度」の変化			合計
		1.浅くなった	2.変わらない	3.深まった	
B中学校	度数(名)	4	5	0	9
	内訳(%)	44.4	55.6	0.0	100.0
C中学校	度数(名)	2	5	1	8
	内訳(%)	25.0	62.5	12.5	100.0
D中学校	度数(名)	0	12	1	13
	内訳(%)	0.0	92.3	7.7	100.0
合計	度数(名)	6	22	2	30
	内訳(%)	20.0	73.3	6.7	100.0

図表21 学校別「L.先生との親密度」の変化(男子のみ)

		「L.先生との親密度」の変化			合計
		1.浅くなった	2.変わらない	3.深まった	
B中学校	度数(名)	1	3	1	5
	内訳(%)	20.0	60.0	20.0	100.0
C中学校	度数(名)	0	4	1	5
	内訳(%)	0.0	80.0	20.0	100.0
D中学校	度数(名)	0	13	0	13
	内訳(%)	0.0	100.0	0.0	100.0
合計	度数(名)	1	20	2	23
	内訳(%)	4.3	87.0	8.7	100.0

まず性別にみる。「L.先生との親密度」が「1.浅くなった」と答えた割合は、女子生徒の方が高い。そして、出身学校別も加えると、B中学校の女子生徒の割合が高い。そしてC中学校の女子生徒も少し高い。逆の言い方をすると、D中学校出身者にとって統廃合は、「L.先生との親密度」に影響をもたらしていない。

総じて、小規模校から新しい中学校に移行した生徒のうち、特に女子生徒で「L.先生との親密度」が「1.浅くなった」と評価した生徒が多い。

以上のように、先生との関係の変化という面では、項目によって若干異なるがとりわけ大きな変化はない。小規模校出身の女子生徒にのみ否定的な方向で大きく影響した。しかし否定的な評価ばかりではないという点が確認できる。

iii. クラスにおける人間関係の側面での評価

新しい中学校における学校生活の「気がかり」のなかでも、クラスにおける人間関係は相対的に多く選択された。この変化はどのように評価しているのだろうか(図表22)。

図表22 統合による変化(クラス)

			1.ばらばら になった/弱 まった/悪く なった	2.変わら ない	3.まとま った/強ま った/よくな った	計	全体的変化 (3-1)
ク ラ ス に つ い て	I.クラスのまとまり具合	度数(名)	10	37	6	53	-4
		内訳(%)	18.9	69.8	11.3	100.0	-7.5
	J.クラスの人への信頼度	度数(名)	6	43	4	53	-2
		内訳(%)	11.3	81.1	7.5	100.0	-3.8
	K.クラスの雰囲気	度数(名)	7	25	21	53	14
		内訳(%)	13.2	47.2	39.6	100.0	26.4

全体として、項目によって大きな差があり、アンビバレントなものとなっていることがわかる。統廃合がよい影響をもたらしていると考えられるのは、「K.クラスの雰囲気」である。「3.よくなった」を選択している生徒が多い。これを選択した生徒は4割にのぼる。他方で「1.悪くなった」を選択した生徒も13.2%いるが、総じて肯定的な評価であると考えられる。しかし逆に、統廃合による変化がよい影響をもたらしたと言い切れないのが、「I.クラスのまとまり具合」と「J.クラスの人への信頼度」である。「1.ばらばらになった」や「1.弱まった」を選択した生徒の方が若干多い(それぞれ-7.5%と-3.8%)。これは、学校生活の「楽しみ」において、「5.給食」や「4.学校行事」を上げることが少なくなったことと関係していると思われる。選択的な対人関係場面か、選択の余地の無い場面か、の違いである。

ここでは「K.クラスの雰囲気」と「I.クラスのまとまり具合」に限定して、男女別、出身中学校別に再集計することで、誰の評価に違いがあるのかを特定したい。

まず「K.クラスの雰囲気」である(図表23・24)である。

図表23 学校別「K.クラスの雰囲気」の変化(女子のみ)

		「K.クラスの雰囲気」の変化			合計
		1.悪く なった	2.変わ らない	3.よく なった	
B中学校	度数(名)	1	0	8	9
	内訳(%)	11.1	0.0	88.9	100.0
C中学校	度数(名)	3	2	3	8
	内訳(%)	37.5	25.0	37.5	100.0
D中学校	度数(名)	1	6	6	13
	内訳(%)	7.7	46.2	46.2	100.0
合計	度数(名)	5	8	17	30
	内訳(%)	16.7	26.7	56.7	100.0

図表24 学校別「K.クラスの雰囲気」の変化(男子のみ)

		「K.クラスの雰囲気」の変化			合計
		1.悪く なった	2.変わ らない	3.よく なった	
B中学校	度数(名)	1	3	1	5
	内訳(%)	20.0	60.0	20.0	100.0
C中学校	度数(名)	0	4	1	5
	内訳(%)	0.0	80.0	20.0	100.0
D中学校	度数(名)	1	10	2	13
	内訳(%)	7.7	76.9	15.4	100.0
合計	度数(名)	2	17	4	23
	内訳(%)	8.7	73.9	17.4	100.0

明らかに男女差がある。全体として「3.よくなった」を選択した生徒が多いという点では変わらないが、男女で全く異なる。女子生徒では半数を超える生徒が「3.よくなった」を選択した。それに比べて、男子生徒は多くない。

他方で出身中学校による違いという点では、B中学校出身者で「K.クラスの雰囲気」が「3.よくなった」を選択した生徒が、女子生徒に多い。D中学校の女子生徒も同様である。傾向が異なるのはC中学校の女子生徒である。「1.悪くなった」が三分の一を超え、「3.よくなった」を選択した生徒と同数となっている。

総じて「K.クラスの雰囲気」が「3.良くなった」を強く支持しているのは、女子生徒で、B、D中学校出身者であることがわかる。これは、先に検討した「B.授業の理解度」の評価と逆の結果になっている。すなわち、授業の理解度が低下したと評価する場合、クラスの雰囲気が良くなったと評価するという関係にある。

次に、「I.クラスのまとまり具合」である(図表25・26)。

図表25 学校別「I.クラスのまとまり具合」の変化(女子のみ)

		「I.クラスのまとまり具合」の変化			合計
		1.ばらばらになった	2.変わらない	3.まとまった	
B中学校	度数(名)	4	2	3	9
	内訳(%)	44.4	22.2	33.3	100.0
C中学校	度数(名)	4	3	1	8
	内訳(%)	50.0	37.5	12.5	100.0
D中学校	度数(名)	1	11	1	13
	内訳(%)	7.7	84.6	7.7	100.0
合計	度数(名)	9	16	5	30
	内訳(%)	30.0	53.3	16.7	100.0

図表26 学校別「I.クラスのまとまり具合」の変化(男子のみ)

		「I.クラスのまとまり具合」の変化			合計
		1.ばらばらになった	2.変わらない	3.まとまった	
B中学校	度数(名)	1	4	0	5
	内訳(%)	20.0	80.0	0.0	100.0
C中学校	度数(名)	0	4	1	5
	内訳(%)	0.0	80.0	20.0	100.0
D中学校	度数(名)	0	13	0	13
	内訳(%)	0.0	100.0	0.0	100.0
合計	度数(名)	1	21	1	23
	内訳(%)	4.3	91.3	4.3	100.0

これも明らかに男女差がある。「1.ばらばらになった」を選択した女子生徒は3割になる。男子生徒と大きく異なる。逆に「3.まとまった」と評価した女子生徒も16.7%いる。そして女子生徒の中でもB、C中学校出身者に特徴がある。B中学校出身者は、「1.ばらばらになった」の方が多いが、「3.まとまった」も多い。しかし、C中学校出身者では、「1.ばらばらになった」の方が多くなる。半数を占めている。

これらのことから、クラスの状況の変化の評価には、性別が大きく関わっている。さらに出身中学校別の違いに焦点化して整理しよう。

B中学校出身者では、「K.クラスの雰囲気」という点では「3.よくなった」を選択する女子生徒がほとんどである。しかし、「I.クラスのまとまり具合」という点では「1.ばらばらになった」を選択する女子生徒は4割を超える。評価が食い違っている。この結果をストレートに解釈するなら、「まとまりがなくなった」からこそ、「雰囲気がよくなった」と理解するしかないだろう。すなわちもとの小規模の学校のクラスよりも人間関係で距離が取れる(「1.ばらばらになった」)からこそ、「3.よくなった」と評価した可能性がある。

C中学校出身者では、「K.クラスの雰囲気」という点でも半々の評価となり、「I.クラスのまとまり具合」という点では「1.ばらばらになった」を選択する女子生徒が半数を占める。B中学校女子生徒とは違い、食い違った評価ではない。少なくとも、統廃合の影響を肯定的なものと評価したとは言にくい。

さらに、これとは全く違うのがD中学校出身者である。「K.クラスの雰囲気」という点で「3.よくなった」を選択する生徒が半数弱を占めているが、これと「I.クラスのまとまり具合」

の選択とは関わっていない。アンケートからわかるのはこの程度のことになるが、女子生徒にとって統廃合は、人間関係の変化を媒介に、複雑な影響をもたらしている。

総じて、小規模校から新しい中学校に移行した女子生徒にとって、クラスの対人関係の変化への評価は錯綜したものとなっている。男子生徒と全く異なっている。

iv. 友人関係の側面での評価

新しい中学校における学校生活の「気がかり」で最も集中的に選択されたもののひとつである友人関係は、どのように変わったと評価しているのだろうか。図表27が評価をまとめたものである。

図表27 統合による変化（友人関係）

			1.気をつかわなくなった/ 減った/浅くなった/弱まった	2.変わらない	3.気をつかうようになった/ 増えた/深まった/強まった	計	全体的変化 (3-1)
友だちについて	D.友だちへの気づかい	度数(名)	0	36	17	53	17
		内訳(%)	0.0	67.9	32.1	100.0	32.1
	E.学校で一緒に行動する友だちの数	度数(名)	6	14	33	53	27
		内訳(%)	11.3	26.4	62.3	100.0	50.9
	F.友だちとの親密度	度数(名)	3	24	26	53	23
		内訳(%)	5.7	45.3	49.1	100.0	43.4
	G.友だちへの信頼度	度数(名)	2	33	18	53	16
		内訳(%)	3.8	62.3	34.0	100.0	30.2

全体的に大きく変化したと評価していることがわかる。

友人関係の量的な側面に関する「E.学校で一緒に行動する友だちの数」で、「3.増えた」を選択した生徒が6割を超えている。友人とのつきあいは量的に増えていると言えそうだ。財務省の「学校規模の最適化に関する調査(暫定版)」において保護者・児童・生徒が「統合して良かった」点に「友達がたくさんできる」を上げていたことは、この事例においても確認される。

友人関係の質的な側面に関する「F.友だちとの親密度」と「G.友だちへの信頼度」でも、「3.深まった」や「3.強まった」を選択した生徒が多くなった。特に、「F.友だちとの親密度」において「3.深まった」を選択した生徒は5割に届きそうだ。しかしだからといって、友だちとの関係が良くなったと楽天的に評価しているわけではない。それは「D.友だちへの気づかい」において「3.気をつかうようになった」を選択した生徒が3割を超えていることからわかる。「1.気をつかわなくなった」を選択した生徒は0名である。肯定的な変化が生じているが、単純なものではない点に注意が必要である。

これらの項目のうち、友人関係の量的な側面に関する「E.学校で一緒に行動する友だちの数」と、友人関係の質的な側面に関する「F.友だちとの親密度」、そして変化の微妙さを示唆する「D.友だちへの気づかい」の3項目を、男女別、出身中学校別に再集計する。

まず、「E.学校で一緒に行動する友だちの数」の変化である(図表28・29)。

図表28 学校別「E.学校で一緒に行動する友だちの数」の変化(女子のみ)

		「E.学校で一緒に行動する友だちの数」の変化			合計
		1.減った	2.変わらない	3.増えた	
B中学校	度数(名)	2	3	4	9
	内訳(%)	22.2	33.3	44.4	100.0
C中学校	度数(名)	2	2	4	8
	内訳(%)	25.0	25.0	50.0	100.0
D中学校	度数(名)	2	4	7	13
	内訳(%)	15.4	30.8	53.8	100.0
合計	度数(名)	6	9	15	30
	内訳(%)	20.0	30.0	50.0	100.0

図表29 学校別「E.学校で一緒に行動する友だちの数」の変化(男子のみ)

		「E.学校で一緒に行動する友だちの数」の変化			合計
		1.減った	2.変わらない	3.増えた	
B中学校	度数(名)	0	1	4	5
	内訳(%)	0.0	20.0	80.0	100.0
C中学校	度数(名)	0	0	5	5
	内訳(%)	0.0	0.0	100.0	100.0
D中学校	度数(名)	0	4	9	13
	内訳(%)	0.0	30.8	69.2	100.0
合計	度数(名)	0	5	18	23
	内訳(%)	0.0	21.7	78.3	100.0

一見してわかるように、男女差が大きい。男子生徒は、「E.学校で一緒に行動する友だちの数」が「3.増えた」を選択した割合が非常に高い。そして特に、B、Cという小規模校出身者において特に顕著である。「規模のある学校」論の主張する望ましい変化(「友達がたくさんできる」)が、男子生徒においては全くその通りであると同様である。

しかし、女子生徒では「E.学校で一緒に行動する友だちの数」で「3.増えた」を選択したのは5割となるが、同時に「1.減った」も2割となっている。そしてこの特徴は、出身中学校による差はそれほどない。男子生徒と同じように、「規模のある学校」論の主張の通りであると言うことはできない。

次に、「F.友だちとの親密度」の変化を検討する(図表30・31)。

図表30 学校別「F.友だちとの親密度」の変化(女子のみ)

		「F.友だちとの親密度」の変化			合計
		1.浅くなった	2.変わらない	3.深まった	
B中学校	度数(名)	2	0	7	9
	内訳(%)	22.2	0.0	77.8	100.0
C中学校	度数(名)	1	3	4	8
	内訳(%)	12.5	37.5	50.0	100.0
D中学校	度数(名)	0	7	6	13
	内訳(%)	0.0	53.8	46.2	100.0
合計	度数(名)	3	10	17	30
	内訳(%)	10.0	33.3	56.7	100.0

図表31 学校別「F.友だちとの親密度」の変化(男子のみ)

		「F.友だちとの親密度」の変化			合計
		1.浅くなった	2.変わらない	3.深まった	
B中学校	度数(名)	0	2	3	5
	内訳(%)	0.0	40.0	60.0	100.0
C中学校	度数(名)	0	2	3	5
	内訳(%)	0.0	40.0	60.0	100.0
D中学校	度数(名)	0	10	3	13
	内訳(%)	0.0	76.9	23.1	100.0
合計	度数(名)	0	14	9	23
	内訳(%)	0.0	60.9	39.1	100.0

これも男女差が大きい。男子生徒では「2.変わらない」を選択した者が多いものの、「3.深まった」を選択した者が4割に迫る。特に、小規模校の男子生徒の選択が多い。「E.学校で一緒に行動する友だちの数」と同じ傾向である。この学校規模という点は、女子生徒も同様の傾向が見受けられる。「3.深まった」を選択した女子生徒は、B中学校で8割に迫る。C中学校も半数を占めている。しかしながら、男子生徒にはいなかった「1.浅くなった」を選択した者もB、C中学校にいる。

さらに、「D.友だちへの気づかい」の変化という点で検討する(図表32・33)。

図表32 学校別「D.友だちへの気づかい」の変化(女子のみ)

		「D.友だちへの気づかい」の変化			合計
		1.気をつかわなくなった	2.変わらない	3.気を使うようになった	
B中学校	度数(名)	0	5	4	9
	内訳(%)	0.0	55.6	44.4	100.0
C中学校	度数(名)	0	2	6	8
	内訳(%)	0.0	25.0	75.0	100.0
D中学校	度数(名)	0	10	3	13
	内訳(%)	0.0	76.9	23.1	100.0
合計	度数(名)	0	17	13	30
	内訳(%)	0.0	56.7	43.3	100.0

図表33 学校別「D.友だちへの気づかい」の変化(男子のみ)

		「D.友だちへの気づかい」の変化			合計
		1.気をつかわなくなった	2.変わらない	3.気を使うようになった	
B中学校	度数(名)	0	4	1	5
	内訳(%)	0.0	80.0	20.0	100.0
C中学校	度数(名)	0	3	2	5
	内訳(%)	0.0	60.0	40.0	100.0
D中学校	度数(名)	0	12	1	13
	内訳(%)	0.0	92.3	7.7	100.0
合計	度数(名)	0	19	4	23
	内訳(%)	0.0	82.6	17.4	100.0

「D.友だちへの気づかい」の変化も男女差が大きい。女子生徒で「3.気をつかうようになった」を選択した者は4割を超える。親密度を高めつつ、同時に気づかいを増している。男子生徒では2割に満たない。出身中学校による差も大きい。特にC中学校出身者で顕著である。特に女子生徒では7割を超える者が選択している。B中学校出身者もこの傾向に近い。女子生徒で4割を超える生徒が、男子生徒でも2割が「3.気をつかうようになった」を選択している。すなわち、男女差と同時に「学校経路」も影響している。

全体として、統廃合の友人関係への影響は、特に男子生徒にとって良いものであったと言える。しかしながら、女子生徒にとっても大勢はそうであるが、特に小規模校から移行した女子生徒にとって友人関係の変化は良いものと感じられながらも、同時に「気づかい」を必要とする関係へ移行したことを意味している。「親密」と「気づかい」を両立させなければならぬ関係への移行である。

v. 自己意識の側面での評価

統廃合によって自己への意識も大きく変わっている。図表34が統廃合による自分自身の変化をみたものである。

図表34 統廃合による変化(自分自身について)

			1.疲れやすくなった/なくなった	2.変わらない	3.疲れにくくなった/ついた	計	全体的変化(3-1)
自分について	R.身体の疲れやすさ	度数(名)	20	31	2	53	-18
		内訳(%)	37.7	58.5	3.8	100.0	-34.0
	S.自分への自信	度数(名)	13	37	3	53	-10
		内訳(%)	24.5	69.8	5.7	100.0	-18.9

「R.身体の疲れやすさ」では、「1.疲れやすくなった」を選択した生徒は、4割に迫っている。前述したように、睡眠時間をもっと欲しいと答えた生徒が75.5%もいたことを思い出していただきたい。バス通学による通学時間の増大、そして睡眠時間の不足は、「1.疲れやすくなった」の選択数を増やした。

また、もっと精神的な「S.自分への自信」を聞いた項目でも「1.なくなった」を選択した生徒は四分の一程度になる。これを男女別、出身学校別に検討してみる。

まず、「R.身体の疲れやすさ」である(図表35・36)。

図表35 学校別「R.身体の疲れやすさ」の変化(女子のみ) 図表36 学校別「R.身体の疲れやすさ」の変化(男子のみ)

		「R.身体の疲れやすさ」の変化			合計
		1.疲れやすくなった	2.変わらない	3.疲れにくくなった	
B中学校	度数(名)	6	2	1	9
	内訳(%)	66.7	22.2	11.1	100.0
C中学校	度数(名)	3	5	0	8
	内訳(%)	37.5	62.5	0.0	100.0
D中学校	度数(名)	5	7	1	13
	内訳(%)	38.5	53.8	7.7	100.0
合計	度数(名)	14	14	2	30
	内訳(%)	46.7	46.7	6.7	100.0

		「R.身体の疲れやすさ」の変化			合計
		1.疲れやすくなった	2.変わらない	3.疲れにくくなった	
B中学校	度数(名)	2	3	0	5
	内訳(%)	40.0	60.0	0.0	100.0
C中学校	度数(名)	0	5	0	5
	内訳(%)	0.0	100.0	0.0	100.0
D中学校	度数(名)	4	9	0	13
	内訳(%)	30.8	69.2	0.0	100.0
合計	度数(名)	6	17	0	23
	内訳(%)	26.1	73.9	0.0	100.0

これも性別によって大きく異なる。女子生徒の方が「1.疲れやすくなった」を選択した者が多い。そして学校別では、B中学校出身者に多い。友人関係における「気づかい」疲れとバス通学が関係しているだろう。D中学出身者も多いが、理由はわからない。

次に、「S.自分への自信」についてみてゆく(図表37・38)。

図表37 学校別「S.自分への自信」の変化(女子のみ)

		「S.自分への自信」の変化			合計
		1.自信がなくなった	2.変わらない	3.自信がついた	
B中学校	度数(名)	3	6	0	9
	内訳(%)	33.3	66.7	0.0	100.0
C中学校	度数(名)	5	3	0	8
	内訳(%)	62.5	37.5	0.0	100.0
D中学校	度数(名)	3	8	2	13
	内訳(%)	23.1	61.5	15.4	100.0
合計	度数(名)	11	17	2	30
	内訳(%)	36.7	56.7	6.7	100.0

図表38 学校別「S.自分への自信」の変化(男子のみ)

		「S.自分への自信」の変化			合計
		1.自信がなくなった	2.変わらない	3.自信がついた	
B中学校	度数(名)	1	4	0	5
	内訳(%)	20.0	80.0	0.0	100.0
C中学校	度数(名)	0	5	0	5
	内訳(%)	0.0	100.0	0.0	100.0
D中学校	度数(名)	1	11	1	13
	内訳(%)	7.7	84.6	7.7	100.0
合計	度数(名)	2	20	1	23
	内訳(%)	8.7	87.0	4.3	100.0

これも性別によって大きく異なる。女子生徒に「1.自信がなくなった」を選択したものがかなり多い。そして学校別では女子生徒において、C中学校出身者が6割を超える選択をしている。これには友人関係で分析した「D.友だちへの気づかい」で、C中学校出身者の女子生徒が多く選択したと関わっている可能性があるが、直接的な分析は次項で行いここでは示唆に留めておく。

(4) 各側面における評価の関係

ここまで五つの側面、学習の側面、教員との関係の側面、クラスの側面、友人関係の側面、そして自己意識の側面の、それぞれに対する統廃合による変化をどのように評価しているのかについて検討してきた。

ところでそれぞれの質問への選択肢には、程度の強弱に対応した3～1の数字を割り振っている。これを順位として考えて、Kendallのタウbを計算し、相関係数を算出する。これによって各側面の関係を検討したい。ただし五つの領域全体の相関を検討すると煩雑になるので、それぞれから項目を抜き出すことにする。

学習の側面から「B.授業での理解度」を、教員との関係の側面から「L.先生との親密度」を、クラスの間関係の側面から「K.クラスの雰囲気」を、友人関係の側面からは2項目、「D.友だちへの気づかい」と「F.友だちとの親密度」を、そして自己意識の側面から「S.自分への自信」を、それぞれ抜き出した。友人関係の側面だけ2項目としたのは、分析の際に強調したアンビバレントを考慮したからである。分析の手順としては、全体の相関を確認し、必要に応じて性別、出身中学校別の補足を入れる。

まず全体の相関を確認する(図表39)。有意確率の高いものを太字にした。

図表39 項目間の相関(全体)

		「B.授業での理解度」の変化	「L.先生との親密度」の変化	「K.クラスの雰囲気」の変化	「F.友だちとの親密度」の変化	「D.友だちへの気づかい」の変化	「S.自分への自信」の変化
「B.授業での理解度」の変化	相関係数		0.56	-0.23	-0.28	-0.07	0.21
	有意確率(両側)	—	0.000	0.076	0.035	0.599	0.107
	N		53	53	53	53	53
「L.先生との親密度」の変化	相関係数			-0.07	-0.12	0.07	0.12
	有意確率(両側)		—	0.607	0.358	0.599	0.356
	N			53	53	53	53
「K.クラスの雰囲気」の変化	相関係数				0.41	0.00	0.04
	有意確率(両側)			—	0.002	0.983	0.760
	N				53	53	53
「F.友だちとの親密度」の変化	相関係数					-0.10	0.09
	有意確率(両側)				—	0.440	0.517
	N					53	53
「D.友だちへの気づかい」の変化	相関係数						-0.31
	有意確率(両側)					—	0.024
	N						53
「S.自分への自信」の変化	相関係数						
	有意確率(両側)						—
	N						

確認できたのは四つの相関である(図表40)。それぞれの相関には便宜的に名称(「正1」等)を付した。名称の正/負は相関の正負を、数字の1・2は相関の強い順に番号を付けたものである。補足的に性別、出身中学校別にも相関を計算したが、全体で確認できた四つの相関以外があった場合は、順に3, 4等の数字を付した。

図表40 各側面の関係(全体)

名称	内容
正1	「B.授業での理解度」の変化と「L.先生との親密度」の変化の非常に強い正の相関
正2	「K.クラスでの雰囲気」と「F.友だちの親密度」の強い正の相関
負1	「B.授業での理解度」の変化と「F.友だちとの親密度」の変化の弱い負の相関
負2	「D.友だちへの気づかい」の変化と「S.自分への自信」の変化の弱い負の相関

実際の変化の動向も加えて、具体的に相関を記述してみよう。

まず正の相関の二つから説明する。統廃合で「B.授業での理解度」が低下したと評価する生徒は多かったが、その場合、「L.先生との親密度」も浅くなったと評価している(「正1」の具体例)。また、「K.クラスでの雰囲気」がよくなったと評価する生徒は多かったが、その場合、「F.友だちの親密度」が深まったと評価している(「正2」の具体例)。

次に負の相関の二つを説明する。「B.授業での理解度」が低下したと評価する生徒は多かったが、その場合、「F.友だちとの親密度」を深めたと評価している(「負1」の具体例)。さらに「D.友だちへの気づかい」は増えたと評価する生徒は多かったが、その場合には「S.自分への自信」が低下したと評価している(「負2」の具体例)。

これらの相関において、「B.授業での理解度」が「正2」と「負1」の両方に登場している。これらの関係を統一的に解釈してみる。「B.授業での理解度」が低下したと評価する場合、「L.先生との親密度」が浅くなったと評価し、代わりに「F.友だちの親密度」が深まったと評価することになったと理解するなら、親密さの対象の移行として考えることもできる。すなわち、「B.授業での理解度」が低下するなかで、親密さの対象が、先生から友だちに移行したとの理解である。学習面での困難さを、人間関係の拠り所の変更として受け止めた、という理解である。しかし逆の理解も可能である。友人関係で親密度を深めるために努力を傾注するが故に、授業の理解度が低下したという理解である。どちらにしても、非常に興味深い結果となっている。「規模のある学校」論において、「統合して良かった」点に「友達がたくさんできる」が上がっていた。この事例の場合、友だちとの親密度が高くなることと、授業の理解度が高まることは両立していない。中教審で議論されていた「子どもが集団の中で切磋琢磨することなどを通じて、一人一人の資質や能力をさらに伸ばしやすい」という憶説は、成り立たないだろう。

また統廃合は、友人関係を良好に維持するために「気づかい」を増やし、それは自分への自信を低下させる。その点も重要である。

さらに同様の方法で、男女別々に順位相関を計算した。ケース数が少なくなるので参考的な意味となる。

女子生徒の場合は、全体で確認された相関の「正1」、「正2」、「負2」に、「D.友だちへの気づかい」の変化と「F.友だちとの親密度」の変化の弱い負の相関(「負3」、図表41)があった。

図表41 各側面の関係(女子生徒のみ、新出のみ)

名称	内容
負3	「D.友だちへの気づかい」の変化と「F.友だちとの親密度」の変化の弱い負の相関

「負3」について説明を加える。統廃合によって「D.友だちへの気づかい」は増えたと評価す

る場合が多かったが、その場合には「F.友だちとの親密度」が浅くなったと評価している。

男子生徒の場合は、全体的傾向と異なる結果となった。確認できたのは、「L.先生との親密度」の変化と「D.友だちへの気づかい」の変化の弱い正の相関（「正3」、図表42）だけである。

図表42 各側面の関係（男子生徒のみ）

名称	内容
正3	「L.先生との親密度」の変化と「D.友だちへの気づかい」の変化の弱い正の相関

男子生徒の場合、「L.先生との親密度」の評価には変化がない。出身中学校での状況がそのまま継続していることを表している。そしてその場合は、「D.友だちへの気づかい」の評価にも変化がない。

出身中学校別の検討も行った。これもB・C中学校出身生徒の数が少ないため参考的な意味となる。

B中学校出身者では「正1」の非常に強い正の相関があった。「B.授業での理解度」が低下したと評価する生徒は多かったが、これと「L.先生との親密度」が浅くなったという評価が強く関係している。C中学校出身者では「正1」、「正2」、「負1」に新しい相関が付け加わる。「B.授業での理解度」の変化と「K.クラスの雰囲気」の変化の弱い負の相関である（負4）。

図表43 各側面の関係（C中学校出身生徒のみ）

名称	内容
負4	「B.授業での理解度」の変化と「K.クラスの雰囲気」の変化の弱い負の相関

C中学校においても、「B.授業での理解度」が低下したと評価する生徒は多かったが、その場合「K.クラスの雰囲気」はよくなったと評価したわけだ。

D中学校出身者では「正3」に新しい相関が付け加わる。「K.クラスの雰囲気」と「D.友だちへの気づかい」の弱い正の相関である（正4）。

図表44 各側面の関係（D中学校出身生徒のみ）

名称	内容
正4	「B.授業での理解度」の変化と「K.クラスの雰囲気」の変化の弱い負の相関

以上のことから、統廃合の影響は、学習、先生との関係、クラス、友人関係そして自己意識の各側面を貫く形で生じ、各側面の評価は連動していたことが確認できた。そしてこの連動に、「B.授業での理解度」という学習面の変化が大きく位置づいていたという点が重要である。

学習の側面（「B.授業での理解度」）が不調になると（この事例の場合はそうである）、先生との関係の側面も不調になり、友人関係の側面が好調になるという連関として整理できる。そして、友人関係は、クラスの雰囲気に連動している。すなわち、学習面の変化が人間関係面の変化に媒介している。

6 まとめ

「はじめに」において指摘した通り、学校統廃合は地方自治体の財政削減と関わって進められている。北海道でも、学校統廃合は急ピッチで進められている。そして統廃合を進める際に、財政削減問題というあからさまな理由だけではなく、統廃合が（学級規模の拡大による）「教育効果」をもつ（「規模のある学校」論）が持ち出される点が非常に重要である。保護者の学校統廃合への同意を取り付けるために、大きな影響力をもっている。これはA中学校の統廃合においても同様であった。しかしながら、統廃合の生徒への影響を検討した研究は、部分的なものに止まり、「教育効果」は確かめられないままになっていた。

本研究は、学校統廃合の「教育効果」について、統廃合による生活と意識の変化を生徒のアンケート調査によって検討したものである。分析の結果、学校統廃合は、無条件で「良い影響」を与えるようなものではないことがわかった。生徒の評価には、二つの分析視角から明らかにしたように、「学校経路」と性別が強く関わっていた。

繰り返しになるが分析結果を要約しておく。

まず、学校生活の「楽しみ」は増えたが、「気がかり」は減っていなかった。そして学校生活の「気がかり」は、それを抱える生徒において深まった。具体的には、学習面と人間関係面での「気がかり」である。これには「学校経路」と性別が大きく関わっていた。

次に、幾つかの側面で、統合前／統合後の学校生活の差異の観察に基づく変化の評価を検討した。

学習面では、小規模校の女子生徒が授業の理解度が低くなったと感じている。先生との関係でもそれが影響している。クラスにおける人間関係の側面では、クラスの雰囲気が良くなったと感じている生徒も多いが、同時にまとまり具合の点では悪くなったと感じる生徒もいる。この両方向への分化は、女子生徒に多く表れ、二つの評価の食い違いが際立っている。友人関係の側面では、統廃合の影響は男子生徒で良いものとして評価されているが、小規模校出身の女子生徒にとって「気づかい」が必要となる友人関係に変化している。自己意識の側面では、統廃合によって生徒は疲労が濃くなったと評価する生徒が多くなった。自分への自信も低下させている。これには友人関係の「気づかい」が関係していた。

ところで、この各側面、すなわち学習、先生との関係、クラス、友人関係、そして自己意識の評価は関連していた。特に、学習における困難が、先生との関係や友人関係に対照的に連動し、友人関係はクラスの雰囲気につながった。また友人関係は、女子生徒において、「気づかい」の多いものとなったが、このことが自分への自信を失わせることにつながっていた。

「規模のある学校」論の主張する望ましい変化（「友達がたくさんできる」）は、この事例でもその通りであったが、それは学習面での否定的な影響に媒介されていた。

統廃合は、1クラスあたりの生徒数を増加させる。それはクラスの友人関係も含めた人間関係に影響を与え、それを乗り切るための努力を生徒に要求するのである。女子生徒に特に厳しい状況をもたらした。またそれは、小規模校出身者にとっても同様である。

アンケートの自由記述欄から、この点で生徒が感じたことの代表例を上げておく。全て女子生徒のものである。

・「クラスの人数が多くなったからクラス全員とは仲良くできないと思う。」

・「女子は特に友人関係が厳しくなった。前の中学で仲良かった友だちは違う人と仲良くなって、その人と私は性格が合わなくなった。結局前の中学のころから仲良かった人とは、もう仲が悪くなった。授業はまったくわからない。」

・「友人関係が複雑になった、疲れが取れない、食欲が落ちた、みんなの性格（自分も含めて）が変わった。」

女子生徒にとってクラスや友人関係をどのように乗り切るかが、とてもシンドイことになっているのである。

「規模のある学校」が念頭に置いているのは、学校規模を拡大することが水平的な生徒間競争を促進し、「教育効果」を果すという仮説である。わずか一例のアンケート結果からではあるが、以下の二つの点で異論を主張できるだろう。

第一点目は、「規模のある学校」の効果が、生徒の「学校経路」や性別によって異なるということである。

第二点目は、統廃合の学習面への影響は、学習面の問題だけに止まるわけではないということである。この事例で生じていた事態は複雑であった。A中学校の教員が新しい中学校で心配していたのは、三つの中学校の生徒が三つのグループで「固まり、なかなか溶け込めない」こと、すなわち生徒間の関係であった。分析から明らかになったのは、生徒の「授業の理解度」（低下）と「友だちとの親密度」（深化）が負の関係で連動しているということである。生徒は、友人との親密度を深めた。「友達がたくさんでき」た、と言い換えても良い。しかし授業の理解度の低下を伴った。逆の言い方をするなら、生徒は友人関係を上手くこなす（新しい学校生活に「溶け込む」）ために、授業の理解度の低下を放置するしかなかったとも言えるのである。このように考えた時、生徒同士の親密度は上昇しつつも、同時に気づかひも増えているというアンビバレンツも理解可能になる。

このような意味で統廃合が授業の理解度に与える否定的な影響を緩和する取り組みは、生徒が親密になることに追い込まれすぎない、気づかひを増やさない友人関係を展開できることに寄与する可能性がある。

「規模のある学校」論は、水平的な生徒間競争の促進が、学校生活をより教育的なものにするという仮説であった。この事例の示唆を端的に述べるなら、確かに「友達がたくさんできる」が、それにより教育的効果は下がるのである。一般的に中学生の友人関係が繊細であることを前提とするなら、この事例の、女子生徒や小規模校出身の生徒において明らかになったことは、他の事例にも妥当する可能性が高い。そのことが確かめられるために、実証的な研究が積み重ねられる必要があるだろう。そして仮に学校統廃合を推進する根拠として、「規模のある学校」論が仮説としてもっている教育効果が立証できない、あるいは負の効果をもつとすれば、そのことを率直に保護者に説明する必要がある。その上で、教育財政の削減と生徒の義務教育を受ける条件の低下をくい止めるために可能なことについて議論を始めなければならない。

注

- 1 本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤C）（研究課題「地方ノンエリート青年の社会的自立と進路指導・キャリア教育の改善に関する研究」、研究代表者・浅川和幸、研究課題番号22530904）によって行った。
- 2 平成20年度6月の財政制度等審議会の「平成21年度予算編成の基本的考え方」でもこの方針は踏襲されている。しかしながら、平成21年度6月の財政制度等審議会財政制度分科会財政構造改革部会合同会議の「平成22年度予算編成の基本的考え方について」には、この方針は見当たらない。
- 3 http://www.mof.go.jp/budget/topics/budget_execution_audit/fy2007/sy190706/1907d_15.pdf
- 4 http://www.mof.go.jp/budget/topics/budget_execution_audit/fy2007/sy190706/1907b.pdf
- 5 多い順に三つのみ取り上げた。先に取り上げた「学校規模の最適化に関する調査」のアンケートの部分と数字が若干異なっている。
- 6 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/038/shiryo/attach/1286194.htm
- 7 この中間報告の表題中には具体的な地名が書かれてあるが、本稿では地名を伏せるために「A」を入れてある。
- 8 小学校における学級の規模と児童の意識の関係については非常に断片的ではあるが先行研究がある。木塚雅貴〔2006〕。
- 9 項目は、「1. 授業に出ること」、「2. 部活」、「3. 生徒会活動」、「4. 学校行事」、「5. 給食」、「6. 休み時間」、「7. 友だちと過ごす時間」、「8. 好きな人と過ごす時間」、「9. 先生と過ごす時間」、「10. その他」である。
- 10 項目は、「1. 勉強のこと」、「2. 部活のこと」、「3. 生徒会の活動」、「4. クラスのこと」、「5. 友人関係」、「6. 好きな人のこと」、「7. 上級生のこと」、「8. 成績のこと」、「9. 進路（将来）のこと」、「10. 自分の性格のこと」、「11. 家族のこと」、「12. 健康のこと」、「13. 見た目のこと」、「14. 通学のこと」、「15. その他」である。
- 11 質問項目は、大きく五つに分かれる。「勉強について」、「友人やクラスについて」、「先生について」、「自分自身について」、「時間について」である。さらにこのそれぞれが小項目から構成されている。「勉強について」は、「A. 授業で発表する回数」、「B. 勉強での理解度」、「C. 勉強でライバルとなる友だちの数」からなる。同様に、「友人やクラスについて」は、「D. 友だちのへ気づかい」、「E. 学校で一緒に行動する友だちの数」、「F. 友だちとの親密度」、「G. 友だちへの信頼度」、「H. 先輩後輩の上下関係」、「I. クラスのまとまり具合」、「J. クラスの人への信頼度」、「K. クラスの雰囲気」からなる。「先生について」は、「L. 先生との親密度」、「M. 先生の生徒への態度」、「N. 先生への言葉づかい」、「O. 先生と会話する機会」、「P. 先生への気づかい」からなる。「自分自身について」は、「Q. 健康状態」、「R. 身体の疲れやすさ」、「S. 自分への自信」からなる。「時間について」は、「T. 友だちと一緒にいる時間」、「U. 睡眠時間」、「V. テレビを見る時間」、「W. ゲームをする時間」、「X. メールをする時間」、「Y. 家族と一緒に過ごす時間」からなる。各項目での変化を、より大きいもの・多いもの、変わらない、より小さいもの・少ないもの、の三つの選択肢からひとつ選択してもらった。例えば、「A. 授業で発表する回数」では、「増えた」、「変わらない」、「減った」を聞いた。

参考文献

- 葉養正明 2006『よみがえれ 公立学校 地域の核としての新しい学校づくり』紫峰図書
- 葉養正明 2011『人口減少社会の公立小中学校の設計－東日本大震災からの教育復興の技術－』協同出版
- 金子泰之 2011「2009年度 若手研究助成最優秀論文（要約） 中学校における学校統廃合が中学生の問題行動と学級の荒れに与える影響—3つの異なる卒業年度の中学3年生の比較にもとづく学校統廃合についての検討—」社会安全研究財団『社会安全』80, 15-21頁

- 川前あゆみ・廣田健 2010「学校統廃合と道東の教育の未来(特集 北海道・釧路からのたより)」『教育』60(4), 103-108頁
- 川前あゆみ 2012「北海道のへき地・小規模校を取り巻く現状と担い手教師の育成の課題」北海道大学大学院教育学研究院紀要第116号, 117-127頁
- 木塚雅貴 2006「小学校における学級の適正規模に関する考察」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』第57巻第1号
- 中西新太郎 2009「子どもの成長と文化—いま何が問題化—」学校運営研究会『学校運営』51(7), 12-15頁
- 高口明久他 2002「山陰の山村地域における教育の状況と学校統廃合問題(1)—鳥取県日南町における子ども, 教師, 保護者, 住民対象の意識調査結果から—」鳥取大学地域教育科学部『鳥取大学教育地域科学部紀要教育・人文科学』第4巻第1号, 1-61頁
- 高口明久他 2003「山陰の山村地域における教育の状況と学校統廃合問題(2)—鳥取県日南町における子ども, 教師, 保護者, 住民対象の意識調査結果から—」鳥取大学地域教育科学部『鳥取大学教育地域科学部紀要教育・人文科学』第4巻第2号, 21-87頁
- 高口明久他 2004「山陰の山村地域における教育の状況と学校統廃合問題(3)—鳥取県日南町における子ども, 教師, 保護者, 住民対象の意識調査結果から—」鳥取大学地域教育科学部『鳥取大学教育地域科学部紀要教育・人文科学』第5巻第2号, 27-63頁
- 田中実 1993「全道小学校アンケートによる今後5年間の学校統廃合に関する統計分析」北海道教育大学『僻地教育研究』47, 29-41頁
- 二神多栄・神谷ゆかり 2003「中学生の友人関係と自己意識の関係について [Ⅱ]—性差を中心に—」安田女子大学大学院文学研究科紀要第8集, 237-250頁
- 若林敬子 1999『学校統廃合の社会学的研究』, 御茶の水書房
- 安田隆子 2009「学校統廃合—公立小中学校に係わる諸問題—」国立国会図書館『調査と情報』第640号, 1-10頁

How the School Integration Changed School Life and Consciousness of Junior High Students: A Case of A JUNIOR HIGH SCHOOL at A Former Coal-mining Area

Kazuyuki ASAKAWA

Abstract

In Japan, integration of public schools is carried forward because of budget deficit of a country and many local governments. It is the same in Hokkaido. However, other explanations are usually taken when integration is carried forward.

Integration is explanation to improve students more. And this reason has an effect for persuasion of parents likewise. However, there are few studies that examined influence to students of integration. In such a meaning, this reason is confined to a hypothesis. I examined influence of integration by matching a focus with students of one junior high school where integration was carried.

A method is analysis of questionnaire survey. As a result of analysis, I have found out the following: Primarily school courses are related to influence of integration. For example, with a school course, I show transition from A Junior High School to B Junior High School. Secondly gender affected influence of integration greatly. The hypothesis that integration has the influence improving students more must be corrected.